

学位論文要約

中国語を母語とする上級・超級日本語学習者における

中日 2 言語の口頭翻訳過程

— 単語の種類と課題の種類を操作した実験的検討 —

広島大学大学院 教育学研究科

教育学習科学専攻 日本語教育学分野

D162641 楊 潔氷

I 論文題目

中国語を母語とする上級・超級日本語学習者における中日 2 言語の口頭翻訳過程
－単語の種類と課題の種類を操作した実験的検討－

II 論文構成（目次）

第 1 章 問題と目的

- 第 1 節 はじめに
- 第 2 節 通訳に関する先行研究の概観
- 第 3 節 本研究における説明論理
- 第 4 節 本研究の目的及び意義

第 2 章 実験的検討

- 第 1 節 上級学習者における日中口頭翻訳過程
－日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 1）
- 第 2 節 上級学習者における中日口頭翻訳過程
－中国語復唱課題と中日口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 2）
- 第 3 節 実験 1 と実験 2 のまとめ
- 第 4 節 超級学習者における日中口頭翻訳過程
－日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 3）
- 第 5 節 超級学習者における中日口頭翻訳過程
－中国語復唱課題と中日口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 4）
- 第 6 節 実験 3 と実験 4 のまとめ

第 3 章 総合考察

- 第 1 節 日本語から中国語への口頭翻訳過程
- 第 2 節 中国語から日本語への口頭翻訳過程
- 第 3 節 日本語教育への示唆
- 第 4 節 本研究の意義
- 第 5 節 今後の課題

引用文献

資料

謝辞

Ⅲ 論文要約

第 1 章 問題と目的

第 1 節 はじめに

1. 2 言語間の翻訳・通訳について

翻訳 (translation) と通訳 (interpreting) に関する研究は, 2 言語間の処理過程や第二言語 (second language : 以下, foreign language を含むものとして L2) 学習への応用等の視点から盛んに行われている (e.g., Dong & Lin, 2013 ; Macizo & Bajo, 2004, 2006 ; 竹野, 2015 ; 辰己, 2015)。グローバル化社会のニーズに応じて, 中国においても日本語翻訳・通訳修士課程 (Master of Translation and Interpreting : 以下, MTI) を設置する大学が増えつつあり (e.g., 宋・権・徐, 2014), 中日 2 言語の翻訳・通訳に関する研究が求められている。中日 2 言語の翻訳・通訳に関して, 誤訳を分析対象とした研究や中国の通訳基準を分析した研究, 機械翻訳に関する研究が多くみられる (e.g., 平塚, 2010 ; 龐, 2015 ; 植野・出羽・熊野, 2005 ; 楊, 2005)。しかし, 認知心理学の視点から翻訳・通訳過程を分析した研究は, 管見の限り見当たらない。翻訳・通訳過程の解明は, 単語や文の処理過程の解明, ひいては, 誤訳の原因や日本語学習者への効果的な日本語教育方法を探ることにつながると考えられる。そこで, 本研究は認知心理学の視点による翻訳・通訳過程に着目する。

2. 翻訳・通訳の定義について

翻訳は, 「言語内翻訳」, 「言語間翻訳」, 「記号法間翻訳」の 3 種類に分類される (Jakobson, 1973 : 川本・田村・村崎・長嶋・八幡屋共訳, 1973 より引用)。多くの場合, 視覚的に呈示された一方の言語を文字で他方の言語におきかえることを指す。通訳は翻訳に含まれるものとし, 「即時性」をもつ訳出活動だと指摘されている (e.g., Pöchhacker, 2004 : 鳥飼監訳, 2008)。本研究は通訳を中心に検討していく。

3. 本研究における口頭翻訳の定義について

本研究は認知心理学の視点から通訳過程を検討する基礎研究である。実際の通訳現場における「通訳」と区別するため, 本研究では, 「口頭翻訳」という用語を使用する。口頭翻訳とは, 一方の言語を口頭で他方の言語におきかえることである。

第 2 節 通訳に関する先行研究の概観

1. 通訳過程に関する先行研究の概観

通訳過程は, 主に起点言語 (source language : 以下, SL) に対する理解過程, 2 言語のコード・スイッチング (code-switching), 目標言語 (target language : 以下, TL) による訳出過程, からなるとされており, コード・スイッチングがいつ行われるかによって, 垂

直的アプローチ (vertical/serial approach) と水平的アプローチ (horizontal/parallel approach) という 2 つの観点で大別されている (e.g., Macizo & Bajo, 2006)。SL の意味が完全に理解された後、理解された意味内容を通して TL で訳出するならば、2 言語の通訳過程は垂直的アプローチによるものである。他方、SL の意味が完全に理解されるまでに語彙や統語のレベルで TL とのコード・スイッチングが行われるならば、2 言語の通訳過程は水平的アプローチによるものである。

Macizo & Bajo (2004) は、スペイン語を第一言語 (first language: 以下, native language とほぼ同義として L1) とする通訳者・翻訳者を対象に、読み上げた文を再度口頭で復唱することを目的とする (以下, 復唱目的) 音読と、読み上げた文を口頭で翻訳することを目的とする (以下, 口頭翻訳目的) 音読をさせ、復唱目的の音読時間 (reading time: 以下, RT) と口頭翻訳目的の RT を比較し、文の理解過程が異なるか否かを検討した。また、Kroll & Stewart (1994) の改訂階層モデル (revised hierarchical model) を基に、2 言語の語彙表象と概念表象との連結強度の非対称性に焦点を当て、翻訳の方向性がスペイン語と英語 (以下, 西英) の通訳過程に与える影響を検討した。

実験の結果、口頭翻訳目的の RT が復唱目的の RT より長かった。この結果から、復唱目的の音読と異なり、口頭翻訳目的の音読では、SL の意味処理のみならず、TL とのコード・スイッチングも行われることが推測された。よって、西英通訳過程では、水平的アプローチが行われることが示唆された。また、L1 から L2 への口頭翻訳目的の RT は、L2 から L1 への口頭翻訳目的の RT よりも短いことが明らかになり、Kroll & Stewart (1994) の改訂階層モデルが文レベルにおいても適用できることが検証された。

Macizo & Bajo (2006) は、西英通訳過程において水平的アプローチがいつ行われるかを検証するため、同根語を用い、文における同根語の位置 (文頭または文末) を操作した実験を行った。その結果、同根語が文末にあるときのみ、同根語の RT が非同根語の RT より短いことが明らかになった。Macizo & Bajo (2006) はこの結果をふまえて、意味のかたまりが処理されてはじめてコード・スイッチングが行われ、水平的アプローチが行われると考察した。これに対し、董 (2010) は、文頭では処理負荷が小さいため、コード・スイッチングが行われなかった可能性を指摘した。

Ruiz, Paredes, Macizo, & Bajo (2008) は、SL におけるターゲット単語の使用頻度を統制したうえで、TL における対訳単語の使用頻度及びターゲット単語の位置 (文頭または文末) を操作し、西英通訳過程を検討した。実験の結果、口頭翻訳目的の音読では、文末において、使用頻度の高い対訳単語に対応するターゲット単語の RT が、使用頻度の低い対訳単語に対応するターゲット単語の RT より有意に短かった。Ruiz et al. (2008) は Macizo & Bajo (2006) の結論を支持し、文末では水平的アプローチが行われると述べた。

これらの研究方法を踏襲し、L2 学習者や MTI の学生を対象に、中国語と英語の通訳過程に関する研究が盛んに行われている (e.g., Dong & Lin, 2013; 王, 2017; 赵, 2013)。実験の結果、水平的アプローチが検証され、さらに学習者の習熟度やワーキングメモリ

(working memory : 以下, WM) の容量, 翻訳の方向性が通訳過程に影響することが指摘されている。

2. 中日 2 言語の通訳について

中日 2 言語の通訳について, SL の理解過程に着目してオンライン的に分析した研究は見当たらないが, 誤訳分析の研究や質的分析の研究は多くみられる (e.g., 平塚, 2010 ; 龐, 2015 ; 楊, 2005)。龐 (2015) は, 同時通訳時に誤訳されやすい長文の特徴やそれに対するストラテジーを分析し, 通訳者が SL の入力情報を語句単位で処理していくことを指摘している。すなわち, 同時通訳の場合, 水平的アプローチが行われる可能性があることが推測される。

3. 通訳過程に影響を与える要因について

通訳過程に影響を与える要因は, 通訳者における 2 言語の熟達度 (proficiency) や認知的要因, 及び通訳する 2 言語の属性, の 2 側面に大別できると考えられる。前者は言語能力や WM の容量が挙げられており, 後者は単語の属性や翻訳の方向性が挙げられている (e.g., Christoffels & de Groot, 2005 ; 成田, 2015)。本研究では, Ruiz et al. (2008) を参考に, 学習者の 2 言語の能力と WM の容量, 及び実験材料の性質を考慮しつつ, 学習者の習熟度と翻訳の方向性を操作し, 中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討する。

4. 先行研究のまとめ及び問題の所在

SL の理解過程に着目し, 単語の属性や文におけるターゲット単語の位置を操作した実験では, 水平的アプローチが行われることが検証されている (e.g., Dong & Lin, 2013 ; Macizo & Bajo, 2006)。中日 2 言語の通訳過程に関する質的研究の結果から, 同時通訳では水平的アプローチが行われる可能性があることが推測される。本研究は先行研究をふまえ, 次の 3 点を改善し, 中日 2 言語の通訳過程を実験的に検討する。

(1) 中日 2 言語における漢字単語の認知処理に関する研究では, 同形同義語を同根語とみなすことが多い (e.g., 邱, 2012)。よって, 本研究は同形同義語を用いる。先行研究と異なり, 文における同形同義語の位置を文中に固定する。文中の場合, ターゲット単語の RT は比較的純粋にターゲット単語そのものの処理過程を反映すると考えられるためである。

(2) 中日 2 言語の通訳では, 同形異義語が誤訳されやすいことが指摘されている (e.g., 凌・徐・趙・張, 2015)。本研究では, 同形異義語も用い, 文中に固定する。

(3) 先行研究 (e.g., Macizo & Bajo, 2004, 2006) では, 意味理解を伴わない音読を防ぐため, 課題遂行中に意味理解に関する正誤判断テストが行われた。課題遂行中に正誤判断テストが行われるならば, 二重課題となり, 復唱または口頭翻訳の課題に干渉を及ぼす可能性があると考えられる。よって, 本研究では, 正誤判断テストを課題遂行後に行う。

第 3 節 本研究における説明論理

本研究では, 先行研究 (e.g., Macizo & Bajo, 2006 ; Ruiz et al., 2008) に倣い, 復唱課題と口頭翻訳課題を用いて, 中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討する。Macizo & Bajo (2004)

によれば、復唱目的の音読は理解のための音読であるという。口頭翻訳目的の RT が復唱目的の RT と同じであれば、口頭翻訳目的の音読では、コード・スイッチングを伴わない意味理解が行われるであろう。この場合、中日 2 言語の口頭翻訳過程は垂直的アプローチによるものである。一方、口頭翻訳目的の RT が復唱目的の RT より長ければ、口頭翻訳目的の音読では、コード・スイッチングを伴う意味理解が行われるであろう。この場合、中日 2 言語の口頭翻訳過程は水平的アプローチによるものである。

復唱課題において、同形同義語の RT と同形異義語の RT が同じであれば、入力情報を音読する際、コード・スイッチングが行われないと推測される。同形同義語の RT と同形異義語の RT が異なるのであれば、入力情報を音読する際、他方の言語も活性化され、コード・スイッチングが行われる可能性があるとして推測される。復唱目的の音読でコード・スイッチングが行われるならば、復唱目的の RT と口頭翻訳目的の RT は直接比較できない。この場合、口頭翻訳課題における同形同義語の RT と同形異義語の RT の比較を通して、中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討する。

口頭翻訳課題において、同形同義語と同形異義語はターゲット単語である場合でも、対訳単語である場合でも、SL を音読する際の RT が同じであれば、TL とのコード・スイッチングは行われなことが推測され、中日 2 言語の口頭翻訳過程は垂直的アプローチによるものであろう。他方、SL における RT が異なるのであれば、SL を音読する際、TL が活性化され、コード・スイッチングが行われる可能性が高いと推測される。この場合、中日 2 言語の口頭翻訳過程は水平的アプローチによるものであろう。

第 4 節 本研究の目的及び意義

本研究の目的は、中国語を L1 とする上級日本語学習者（以下、上級学習者）と超級日本語学習者（以下、超級学習者）を対象に、復唱課題と口頭翻訳課題を用い、同形同義語と同形異義語がターゲット単語または対訳単語として文中にある場合の、中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討することである。また、口頭翻訳課題における実験参加者の産出文も合わせて分析し、同形異義語が誤訳されやすい原因を探り、日本語教育への示唆を導出する。

中日 2 言語の口頭翻訳過程の解明は、異なる語族に属する 2 言語の通訳過程の解明につながるであろう。また、同形異義語が誤訳されやすい原因が分かれば、教育現場に有益な示唆が与えられるであろう。

第 2 章 実験的検討

第 1 節 上級学習者における日中口頭翻訳過程

－日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 1）

実験 1 では、上級学習者を対象に、日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用い、同形同義語または同形異義語がターゲット単語として文中にある場合の、ターゲット単語に対す

る復唱目的の RT と口頭翻訳目的の RT を比較した。実験の結果、復唱課題において、同形異義語の RT が同形同義語の RT より長かった。上級学習者が復唱を目的に L2 で入力情報を音読する際、L1 も活性化され、コード・スイッチングが行われる可能性があることが示唆された。他方、口頭翻訳課題において、同形同義語の RT が同形異義語の RT より長かった。上級学習者が口頭翻訳を目的に L2 で入力情報を音読する際、L1 とのコード・スイッチングが行われ始める可能性があることが推測される。すなわち、上級学習者の日中口頭翻訳過程では、水平的アプローチが行われる可能性が高いことが示された。

第 2 節 上級学習者における中日口頭翻訳過程

－中国語復唱課題と中日口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 2）

実験 2 では、上級学習者を対象に、中国語復唱課題と中日口頭翻訳課題を用い、文におけるターゲット単語の対訳単語が同形同義語または同形異義語の場合の、ターゲット単語に対する復唱目的の RT と口頭翻訳目的の RT を比較した。実験の結果、復唱課題では、対訳単語の種類にかかわらず、ターゲット単語の RT の間に有意な差がみられなかった。L1 で復唱課題が遂行される際、L2 とのコード・スイッチングが行われないことが明らかになった。他方、口頭翻訳課題では、同形同義語に対応するターゲット単語の RT が同形異義語に対応するターゲット単語の RT より有意に長い傾向がみられた。また、記述統計の範囲内ではあるが、同形同義語と同形異義語のそれぞれに対応するターゲット単語が音読される際、前者において口頭翻訳目的の RT が復唱目的の RT より長かったが、後者において口頭翻訳目的の RT が復唱目的の RT とほぼ同じであった。これらの結果から、中日口頭翻訳過程では同形同義語と同形異義語は異なる処理が行われることが推測される。同形同義語に対応するターゲット単語が音読されるときは、TL とのコード・スイッチングが行われ、水平的アプローチが行われる可能性があるが、同形異義語に対応するターゲット単語が音読されるときは、垂直的アプローチが行われる可能性が高いことが示唆された。

第 3 節 実験 1 と実験 2 のまとめ

実験 1 と実験 2 では、上級学習者の中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討した。実験の結果、翻訳の方向性にかかわらず、中日 2 言語の口頭翻訳過程では水平的アプローチが行われる可能性が高いことが示された。ただし、L1 から L2 への口頭翻訳過程では、同形同義語と同形異義語は異なる処理がなされる可能性がある。

第 4 節 超級学習者における日中口頭翻訳過程

－日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 3）

実験 3 では、実験 1 と同様の方法を用い、超級学習者の日中口頭翻訳過程を検討した。実験の結果、復唱課題において、同形異義語の RT と同形同義語の RT の間に有意な差がみられなかった。超級学習者が復唱を目的に L2 で入力情報を音読する際、コード・スイッチ

ングが行われず、入力情報の意味処理は L2 の音韻処理と並列的に行われる可能性が高いことが示唆された。他方、口頭翻訳課題においても、同形同義語の RT と同形異義語の RT の間に有意な差はみられなかった。超級学習者が口頭翻訳を目的に L2 で入力情報を音読する際にも、コード・スイッチングが行われない可能性が高いことが推測される。超級学習者の日中口頭翻訳過程では、垂直的アプローチが行われる可能性が高いことが示された。

第 5 節 超級学習者における中日口頭翻訳過程

－中国語復唱課題と中日口頭翻訳課題を用いた実験的検討－（実験 4）

実験 4 では、実験 2 と同様の方法を用い、超級学習者の中日口頭翻訳過程を検討した。実験の結果、復唱課題において、同形同義語に対応するターゲット単語の RT と同形異義語に対応するターゲット単語の RT の間に有意な差がみられなかった。L1 による復唱目的の音読では、コード・スイッチングが行われないことが明らかになった。他方、口頭翻訳課題においても、対訳単語の種類にかかわらず、ターゲット単語の RT の間に有意な差がみられなかった。L1 から L2 への口頭翻訳目的の音読でも、コード・スイッチングが行われない可能性が高いことが推測される。超級学習者の中日口頭翻訳過程では、垂直的アプローチが行われる可能性が高いことが示された。

第 6 節 実験 3 と実験 4 のまとめ

実験 3 と実験 4 では、超級学習者の中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討した。実験の結果、課題の種類にかかわらず、入力情報を音読する際、コード・スイッチングが行われないことが推測される。超級学習者の中日 2 言語の口頭翻訳過程では、垂直的アプローチが行われる可能性が高いことが示された。

第 3 章 総合考察

第 1 節 日本語から中国語への口頭翻訳過程

実験 1 と実験 3 では、学習者の習熟度を操作し、日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用いて、同形同義語と同形異義語がターゲット単語として文中にある場合の日中口頭翻訳過程を検討した。上級学習者の日中口頭翻訳過程では、水平的アプローチが行われる可能性が高いことが推測される。他方、超級学習者の日中口頭翻訳過程では、垂直的アプローチが行われる可能性が高いことが推測される。

第 2 節 中国語から日本語への口頭翻訳過程

実験 2 と実験 4 では、学習者の習熟度を操作し、中国語復唱課題と中日口頭翻訳課題を用いて、同形同義語と同形異義語が対訳単語として文中にある場合の日中口頭翻訳過程を検討した。上級学習者の日中口頭翻訳過程では、同形同義語に対応するターゲット単語が

音読される際、水平的アプローチが行われる可能性があることが推測される。他方、超級学習者の中日口頭翻訳過程では、垂直的アプローチが行われる可能性が高いことが推測される。

第3節 日本語教育への示唆

本節では、口頭翻訳課題における実験参加者の産出文を分析し、語連結の視点から同形異義語が誤訳されやすい原因を探り、教育的示唆を導出した。上級及び超級学習者の産出文から、類似単語による訳出や中国語の文字通りの直訳がみられた。これらの訳出は意味的に誤っていると断言できない場合もあるが、自然さに欠ける傾向がある。同形異義語を正確に検索・産出するために、学習者に習得段階から同形異義語の意味や用法の相違点に気づかせ、同時通訳の訓練方法であるクイック・レスポンス (quick response) やシャドーイング (shadowing) を活用し、中日 2 言語間の正しい語連結を強く形成させることが重要であることが示唆された。

第4節 本研究の意義

本研究は、翻訳の方向性と学習者の習熟度を操作し、中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討した。異なる語族に属する 2 言語の通訳過程の一端を明らかにした。また、口頭翻訳課題における実験参加者の産出文を分析し、語連結の視点から同形異義語が誤訳されやすい原因を探究し、教育的示唆を導出した。

第5節 今後の課題

本研究では、SL の理解段階においてコード・スイッチングが行われるか否かに着目し、中日 2 言語の口頭翻訳過程を検討した。今後は、中日 2 言語の言語的特徴を考慮しつつ、統語レベルによる実験的検討を行う必要がある。また、WM と長期記憶の視点による実験的検討も必要である。さらに、長文や通訳現場からのデータベースを用い、聴覚呈示による実験課題を用いた検討も求められる。

引用文献

- 邱 學瑾 (2012). 「漢字圏日本語学習者における日本語単語の意味処理に及ぼす母語の影響—聴覚呈示の翻訳判断課題による検討—」『教育心理学研究』60(1), 82-91.
- Christoffels, I. K., & de Groot, A. M. B., (2005). Simultaneous interpreting: A cognitive perspective. In J. F. Kroll & A. M. B. de Groot (Eds.), *Handbook of bilingualism: Psycholinguistic approaches* (pp. 454-479). New York: Oxford University Press.
- 董 燕萍 (2010). 「交替传译中的语言转换心理机制—非对称有限并行加工模型—」『中国英语教育』第4期, 1-11.[Online]<https://www.sinoss.net/qikan/uploadfile/2011/0508/20110508114608551.pdf> (2018年4月25日閲覧)

- Dong, Y. P., & Lin, J. X. (2013). Parallel processing of the target language during source language comprehension in interpreting. *Bilingualism: Language and Cognition*, 16 (3), 682-692.
- 平塚ゆかり (2010). 「現代日中通訳者の『信達雅』—インタビュー分析を通して—」『異文化コミュニケーション論集』 8, 45-55.
- Jakobson, R. (1973). *Essais de linguistique générale*. Paris : Les Éditions de Minuit. (ロマン・ヤーコブソン, 川本茂雄・田村すゝ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子(共訳)(1973)『一般言語学』, みすず書房)
- Kroll, J. F., & Stewart, E. (1994). Category interference in translation and picture naming : Evidence for asymmetric connections between bilingual memory representations. *Journal of Memory and Language*, 33 (2), 149-174.
- 凌 蓉・徐 旻・赵 鸿・张 建 (2015). 『日汉口译教学研究』 華東理工大学出版社
- Macizo, P., & Bajo, M. T. (2004). When translation makes the difference: Sentence processing in reading and translation. *Psicológica*, 25, 181-205.
- Macizo, P., & Bajo, M. T. (2006). Reading for repetition and reading for translation: Do they involve the same processes? *Cognition*, 99, 1-34.
- 成田 一 (2015). 「翻訳と通訳の脳内処理メカニズム(機械翻訳技術の向上)」『Japio year book (特集・寄稿集編)』, 294-302.
- 龐 焱 (2015). 「日中同時通訳における誤訳しやすい長文に対応するストラテジーとテクニック」『神戸女学院大学論集』 62 (2), 163-178.
- Pöschhacker, F. (2004). *Introducing interpreting studies*. Routledge. (フランツ・ポエヒハッカー, 鳥飼玖美子(監訳)(2008)『通訳学入門』, みすず書房)
- Ruiz, C., Paredes, N., Macizo, P., & Bajo, M. T. (2008). Activation of lexical and syntactic target language properties in translation. *Acta Psychologica*, 128 (3), 490-500.
- 宋 晓凯・権 慶梅・徐 鳳 (2014). 「中国の大学院における日本語通訳・翻訳教育の現状と課題—曲阜師範大学を例に—」『ICCS 現代中国語ジャーナル』 6 (1), 43-50.
- 竹野純一郎 (2015). 「ポーズを利用したリピーティング練習と逐次通訳練習の効果の比較」『中国地区英語教育学会研究紀要』 45, 51-60.
- 辰己明子 (2015). 「大学英語教育における翻訳指導に関する研究—一般英語授業での翻訳指導実践を事例として—」『翻訳研究への招待』 13, 67-82.
- 植野 研・出羽達也・熊野 明 (2005). 「ウェブ文章資源からの中日対訳推定における文脈窓幅の役割」『情報処理学会研究報告自然言語処理(NL)』 2005 (1), 79-84.
- 王 非 (2017). 『口译过程研究：记忆机制与信息加工模型』 科学出版社
- 楊 承淑 (2005). 「通訳における情報表示—日本語を起点言語として」『通訳研究』 5, 31-52.
- 赵 晨 (2013). 「中英不平衡双语者口译中的源语理解过程」『外语教学与研究(外国语文双月刊)』 45 (1), 93-104.